

「自律化」を意識する年に

コロナ禍やウクライナ侵攻など、先の見えない課題が山積する中で、新しい年を迎えました。今年こそは明るい年にと願うばかりです。

さて、「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能」というレポートが発表されたのは、私が学長に就任した2015年のことでした。それ以来、人工知能チームが盛り上がりを見せましたが、最近ようやく人工知能でできることとできないことが、冷静に理解されるようになってきたと感じます。

先日ある記事に、「デジタルネイティブと呼ばれる世代が苦手なこと」①「考えること、質問すること」②「想定外」③「電話」とありました。実は、この三つが現在の人工知能が

苦手とすることと一致するというのです。現状、人工知能ができることは、あらかじめ決められたルールや作法に従い物事を進めること、すなわち「自動化」です。自ら考え行動する「自律化」は、まだ人間にしかできません。人工知能が益々社会に浸透していく時代、与えられた課題を効率的に解くことは人工知能に任せ、人間は自ら課題を創り出すことに専念し、うまく共生していくべきです。にもかかわらず、技術の進歩や技術のブラックボックス化は、日々の生活から考えるきっかけを奪い、我々自身や社会の人工知能化に拍車をかけているように思います。

本学は「学生を成長させる力で選ばれる大学」を目指すと宣言しまし

た。その意図するところは、多様なプログラムで自ら考え行動する自律的人材を育てる、まさに人工知能にはできない能力を身につけるということです。自ら学んだ専門力を社会に活かす経験を通して、他人とのコミュニケーション、不測の事態への対応、試行錯誤する力を養う、そんな体験重視の教育活動にさらに磨きをかけたいと思っています。

ビジョンは打ち出しましたが、具体的な行動への落とし込みはまだ道半ばです。教職員の皆さんにも、さらなるご協力をお願いします。人工知能にできないことにどれだけ時間を費やしているか、常にそれを振り返り意識する、そんな年にすることを年頭の誓いにしたいと思います。



学長
成田 健一